

029
191
1

一
一
馬
之
御



027
191
/

初時雨

伊勢 春波著

愛知女子
第 11872 號
圖

享保十三年刊



序

くらきだう



欽人の家老本のかいり
去年 麦林翁乃の功し
多能若いまは拾ひし
と形し ちりし
ありいやりし
ま似すに又の形

音

ふれり我寺乃伴
らるるの如く
あふ。

長行

戊申 十月日

選

赤い実農行く
あふ林

多田と若と鉄炮乃乃
吃家

兼門乃軍母
赤波

京の白ひ乃
陸之

双六の毛目
飛小

雅と揚子
雨鳩

下化寮の下次
李江

茶茶
関石

若くは、舟を、草花乃、五場、夜の、

南畝

大名下り乃、琴、

加濃

衣張の、

珍舎

夕も、

菊二

沙衣、

東里

中、

社谷

意、

温故

管、

白圖

月、

夜秋

け、

茶丈

物、

家

飯、

波

帷、

之

女、

小

菊、

鳩

吾、

江

燭帳乃燭も形と因とは靠ひ

接公卷もくも因後こひる

今文乃奈の篇ミエもよりや所

程を柱より市て決立

ちししや朝日ミエ宮丹障隔り

船揚ミエやぐり河通る流

一家のて田ミエ石上満秋寺

五島ミエくく海くくりて島

石

畝

濃

舎

二

星

谷

放

異日と珍珠ミエけ鳩ミエ早ミエ記て

かきくくくくくくくく

道くくくくくくくくくく

雲いふくくくくくく

史

林

志

草

平の子を鼻欠ふ所 河内
 名ももふ所の所 日宮
 蝶の舞未だまはる 東里
 何乃傷と流る 春波
 葉の香れ 酒坊
 又新うらに河内 珍舎
 女帝系考より 吟家

町中小的乃多あり 鹿小
 大小乃類 温故
 く川志る 関不
 帆柱も寝て 第二
 猪いとく 杜谷
 風吹の平も合たり 陸之
 湖とせし 加濃
 子張の角と尻して 本島

与一ひま乃ふん種くまれり

西崎

かすひさし一えをて海島く月夜

茶更

原ぬまを根えりり行雲あふ

春渚

ふりりぬ影ふあふやうくま

可盛

山細の人をて何く然三つはふ

妻後

相輝結の中をぬあふ和ゆし道

秋女

过強うらふけり終て何ゆけり

竹花

二子山部ゆはぬて時多けり

若女

夕那乃岩い高まなり神志く終

杜世

老僧い山のちりしとてをれり

白鬼

蓮池や何ゆ乃ゆかきせと

花枝

後舟且葉い若くれぬしまふ

夕由

山姥乃掃像の終ましと終り

空道

端綿も覆ししと白雲くゆ島

大行

局く端もくくくくくくくく

佳玉

然てはくくくくくくくくく

萱蒲

了	整	老	乃	去	信	乃	と	と	と	対	自	の	日	福引
茶	の	紙	小	原	中	美	阿	り	神	一	之	座	非	昨非
種	少	一	種	と	是	亦	も	実	乃	皆	の	座	來	座來
あ	ら	し	や	ら	し	と	種	一	之	保	け	残	丈	残丈
身	合	の	土	農	又	高	一	之	是	乃	り	茂	林	茂林

京寺町押小路七
 檜屋治三右衛門

